

一つの疾病について、各地に多数の記念ないしは残影を認めるということは、ペスト以外には例を見ないことで、ペストの被害の深刻さ、それから逃れたいという人々の切なる願いを、そこに見ることができるといえる。

一 ボンの市内にあるキリスト磔刑の石塔は、一六六六年の当地方のペスト流行時にペストから回復した一夫婦が感謝をこめて建てた塔である。また、ボン大学医史学教室には、一七二九年ローマで発行された健康証明書が保存されている。ペスト流行時、旅行者が市門に入るとき、これを提示して許可を求めた。

二 バードホネフの一部落において、一六六六年に流行のペストでは、十二人しか生き残らなかつた。そのうちの二人が、感謝のしるしに建てたという「アンナの小祠」がその部落内にある。また、生き残つた町の人々が感謝して、聖セルバチウスに捧げた同名の礼拝堂が町外れの山の中にある。

三 アンデルナツハはペスト医師ウインテルの生誕地であり、彼の名を冠したウインテル博物館がある。また、この町には小さなペストの塔も見られる。

四 ビンゲンの町当局は、一六六六年に流行のペスト鎮圧を、ペストの守護聖人ロフスに願つてかなえられたので、当局が感謝をこめて、ロフス礼拝堂を同名の山に建てた。堂内の主祭壇には聖人ロフスが祭られ、また、側廊には「ペスト祭壇」がある。

五 アイフェル火山帯の中央部、トーテンマール湖の湖畔に

あつたウインフェルドの部落は、十六世紀前半のペストの流行で壊滅し、今ここには、無人の礼拝堂と、墓地のみが残っている。

(平成九年九月例会)

ケガレの思想の歴史的展開

杉田暉道

ケガレは日本人特有の宗教感覚である。歴史事典には「罪も禍も皆同じくケガレで悪霊の仕業と考へる」とある。ケガレをもう少しわかり易く説明すると、たとえばわれわれが日常使っている、自分の茶のみ茶碗を自分の子供に「これはわたしが二十年使つていたもので、熱湯消毒したから全く汚れていない。だからお前にやろう」といっても、子供は喜んでこれを受けとらない。この感覚がケガレである。ケガレの思想は古くから存在し、すでに古代インドの『マヌ法典』(AD二世紀に成立)にその記述がみられる。すなわち、出産、性交、排泄行為、経血、死などの根源的な生命現象によつて生ずる、十二種の物質およびこれに関係した職業を、ケガレが生ずる強力な源とした。この思想は日本では『古事記』、『祝詞』にみられる。『古事記』では、「いざなぎの命は、ウジのわいたいざなぎの命(いざなぎの命の妻)の死体を見たためにケガレた体になるが、清めの儀式を行うことにより、日本の主要神

